



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第4号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2010-05-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73489
Type	journal
File Information	DRFmonthly_4.pdf





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第4号

No. 4 May, 2010

【特集1】DRF「新」参加機関紹介第1弾

【特集2】Springertンネルってトンネル？
～オープンアクセスのバリエーション

その他の記事

応募企画 川柳をつくろう お題「ILL」
編集部特派員参加報告 シンポジウム
「科学技術コモンズと情報知識学の挑戦」

特集1 DRF「新」参加機関紹介第1弾

2月の新体制発足に際し、また、新年度に入り、40の大学・研究機関がDRFに加わりました。

届いたコメントを
紹介します♪

島根県立大学



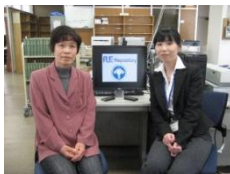
まだまだこれからです
ので、暖かい目で見
守ってください。

神戸市外国語大学



IR構築に向けて邁進し
ます！アドバイスよろ
しくお願いいたします。

愛知教育大学



DRF
頼りにしてます(^^)／

新潟青陵大学



リポジトリをとおして、
県内外の大学との輪を
大きく強くできそうな
DRFとShaReの可能性
に期待大です！

北海道教育大学



DRFのリポジトリ
への情熱に刺激され
ます！

福岡教育大学

コンテンツの収集がうまく
いかないのは、広報がで
きないからだと思えます。
次期図書館システムでは、
アクセス件数やダウンロード
件数の表示を追加するな
ど、目に見えるかたちでサ
イトを刷新し、もっと拡張
していきたいです。よろし
くお願いします！

広島市立大学



DRFで広がる友だち
の輪！

名古屋工業大学



コンテンツ充実キャン
ペーンとメタデータ入
力の指標を期待します

跡見学園女子大学



昨年11月より初参加し
ました。機関リポジト
リは初めてなので役立
つ情報など色々と教え
てください。

青森県立 保健大学



(アプラス)

頼りにしてます！

コメント
DRFに
期待すること

九州女子大学・ 九州女子短期大学

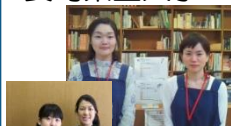
今年度から加盟
しました九州女
子大学・短期大
学附属図書館で
す。特にチー
ムや担当というわけでやっ
ていません。とりあえずみ
んなで右往左往しながら今
はリポジトリ構築、学内広
報にいそいそです。

徳島大学



ご支援よろしくお願い
します。

長崎県立大学



九州地区
でのワークショップ
(やわらかめ)開催お
願いします！

高知大学



DRFからの情報を頼り
にやっています。今後
も皆さんのノウハウを
教えてください。よろ
しくお願いします！

大阪女学院大学・ 短期大学



もうすぐリポジトリデ
ビューします。どうぞ
よろしくお願いします。

放射線医学総合研究所



何のための、誰のための
リポジトリ？

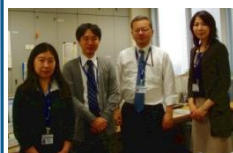
これが私たちの取り組みの原点
です。そのためには、出版社や
学会事務局、民間企業の方など
含めて、幅広い立場の方々に気
軽に議論に参加していただける
ような場になると良いですね。
よろしくお願いします。

福島大学



リポジトリの牽引
役！研修教育に期待
します。

総合研究大学院大学



大学としてはWEKO導
入第1号の総研大リポ
ジトリ、あたたかく見
守ってください。

城西大学



皆様ご指導よろしく
お願いします！

特集2 Springerトンネルってトンネル？

UCバークレイ研究効果増進事業（BRII）

アメリカのカリフォルニア大学バークレイ校の試験的プロジェクト(2008.1-2009.6)。

バークレイ校の構成員(教員・ポスドク・院生など誰でもOK)が論文を雑誌に投稿するときに、BRII (Berkeley Research Impact Initiative) に申請して認可されれば、雑誌に掲載された論文をオンラインで無料公開(=Open Access化)するための費用が助成されるというものです。OA誌への投稿料(上限は1本3,000ドル)、もしくは非OA誌への投稿論文をOA化する経費(上限は1本1,500ドル)が助成の対象です。助成金のスポンサーは図書館と研究担当学長で、予算は100,000ドルが計上されました。

結果として、プロジェクト期間中に52本の論文がOA化され、予算の7割を消化、そのうち約60%がOA誌への投稿料負担に充てられたということです。

BRIIプロジェクトは学内の研究者からは好意的な反応を得ており、研究者へのOA普及のよい機会となっているということでした。バークレイ校では、BRIIプロジェクトで得られた研究活動のデータを活かし、今後の持続的なOA化支援につなげていきたいとしています。

<http://www.lib.berkeley.edu/brii/>

(北海道大学附属図書館 城恭子)

左 UC Berkley Bioscience & Natural Resources Libraryの Beth Weil館長と筆者



出版社が提供するOAサービス

学術雑誌出版社のSpringerは、2004年からOpen Choiceという有償のオープンアクセスサービスを提供しています。これは、Open Choiceを選択した著者が一定金額を出版時に支払うことで、オンライン版の論文全文を公開できる、というものです。他の大手出版社でも類似のサービスを行っています。

海外では、Springer社の電子ジャーナル契約の際に、このOpen Choice料金を含めた「包括契約」を試行している大学や研究機関があります。購読機関の研究者は、一定の制約はあるもののOpen Choice料金を支払うことなくOAを実現できるというわけです。上記のカリフォルニア大学のほか、オランダのコンソーシアム等で行われていて、Leo Waaijers氏は2009年10月のDRIVER Confederation Summitにて、この包括契約を“**Springer Tunnel**”と呼んでいます。Springertunnelの効果については、現在も検討が続けられています。

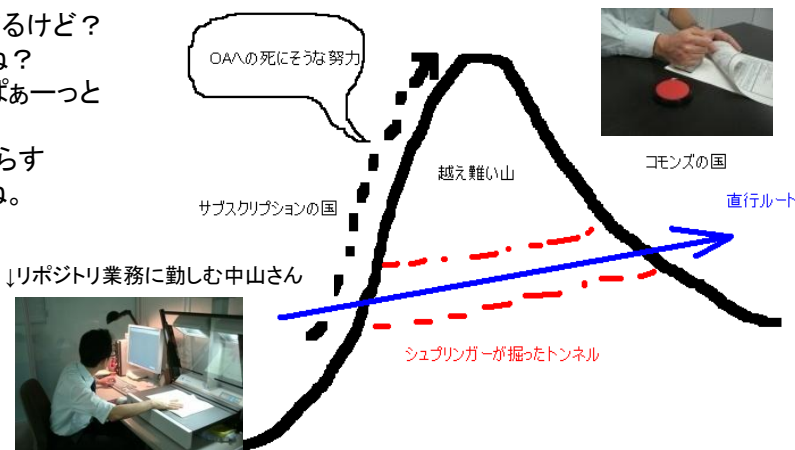
オープンアクセスは、図書館業務の様々な局面に関係する話題なのですね。

おや、なにやら話し声が。

つくりボジトリ公式キャラクターに扮して広報活動。左から
ちゅーりっぷさん(大澤さん)と がまじゃんばー(真中さん) →



- が えっ、トンネル？ 筑波山のトンネルなら知ってるけど？
- ち この間、ケーブルカーに乗ったときのトンネルね？
- が そう。周りがちょっと暗くなって、その後、急にぱあっと光がさしてきて、なんだかわくわくしたんだ。
- ち Leoさんは、Springertunnelもそんな光をもたらすオープンアクセスの近道だよ、と言っているのね。
- が Springertunnelの絵を描いてみたよ。
- ち なあんだ分かってるじゃない。え、し、死にそうな努力？？？ そうそう、ケーブルカーに乗るときは「お金」がいるの。狸さんに貰った木の葉じゃだめよ。
- が 知ってるよう。木の葉は冗談だってば！！
でも、Springertunnelってうまくいくのかなあ？



(筑波大学附属図書館 大澤類里佐、中山知士、真中孝行、徳田聖子 / 協力 小樽商科大学附属図書館 杉田茂樹)

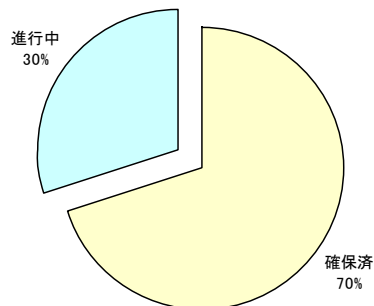
SCOAP³今どうなっているの

高エネルギー物理学分野の文献のオープンアクセス化を目指すコンソーシアム SCOAP³ (Sponsoring Consortium for Open Access Publishing in Particle Physics) の参加機関は24カ国で、2010年4月末には、負担率の最も大きな米国(約24%)の経費が確保され、OA誌の刊行に必要な年間経費1,000万ユーロの約70%が確保されました。負担率の約22%を占めるBRICS(ブラジル、ロシア、中国、インド)及び日本のうち、少なくとも3カ国がSCOAP³参加の同意に達しつつあると推測されています。

Cf. 参加機関 <http://www.scoap3.org/whoisscoap3.html>

必要経費の確保 <http://scoap3.org/fundraising.html>

(東北大学附属図書館 加藤信哉)



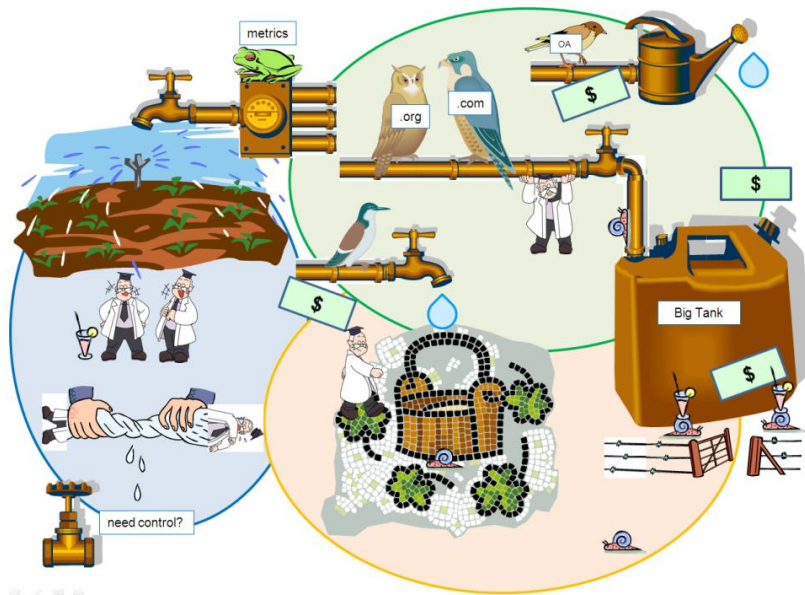
SCOAP³必要経費の確保状況
平成22年4月27日現在

あの人に
聞きたい！



土屋俊 (DRFアドバイザー・千葉大学文学部)

OAをめぐるひとつの戦場は、依然として“金色派”対“緑色派”の論争であるが、これは、理念ではなく、戦略、戦術に関するものである。金色派は、出版モデルを変革してオープンアクセスな学術雑誌を刊行することを当面の目的と考えるのに対して、緑色派は、現行の出版モデルには手をつけずに著者のセルフアーカイブによってオープンアクセスをまず実現しようとする。前者の代表的プロジェクトは、PLoSであり、後者の代表的論者はスティーブン・ハーナッドである。既存の出版者(会社、学会)は前者の立場でも経営は可能であると考え、OA雑誌を創刊、買収したり、論文単位でオープンアクセス化料をとるなどのモデルの拡大を行なっているが、機関リポジトリ振興の考え方は後者の立場とより整合的であるが、紀要の電子化提供などは前者の立場に近いともいえる。論争自体はところを変えつつ止まないが、この対立軸を自覚しておくことは、機関リポジトリ運営者としては重要なことである。



(図. 北海道大学附属図書館 山本和雄)

arXiv.orgからの予算支援の依頼

arXiv.orgは言うまでもなく、物理学、数学のプレプリントサーバで、1990年代に大成功を収め、機関リポジトリのモデルとなったシステムです。ところで、考案者であるポール・ギンスパーグ (Paul Ginsparg) の移籍に伴い、arXiv.orgの運営は現在コーネル大学図書館が行っています。しかし、その負担(人件費、運営費)は2010年実績で40万ドルもあり、同図書館の財政を圧迫しています。この負担を分散し、arXiv.orgの長期運営を可能にするため、各国の学術コミュニティに利用統計に基づいた貢献が求められています。我が国に対しては、コーネル大学から国立情報学研究所を通して打診があり、すでに名古屋大学、東京大学などが予算の分担に名乗りをあげています。

負担額は、利用(ダウンロード)件数の上位から、(1)100位まで(利用の55%)、(2)101位から200位(25%)、(3)201位以下(20%)、の3階層に分類され、年間で、(1)は4,000ドル、(2)は3,200ドル、(3)は2,300ドルとなっています。ちなみに日本は15機関が200位に入っています。また、今後は、長期的な持続性の確保のための経済モデルも検討することを表明しています。

arXiv.orgは、京都大学を含めて世界に13のミラーサーバサイトを持ち、対象学問領域の拡大や外部施設でのバックアップ、アーカイブ用リポジトリの開発など、積極的な学術流通支援を行っています。すでに物理学分野では欠くことのできないコミュニケーションツールであり、その持続は研究者だけでなく図書館コミュニティにとっても重要な課題です。なお、詳しい情報は

<http://arxiv.org/help/support/> を参照ください。

(金沢大学情報部 内島秀樹)

川柳をつくろう お題「ILL」 オレの指写ってるけどまあいいか -悠

応募
企画

・受付担当としてはクレームにしたいのですが、まあいいか。依頼が多くて ちょっと投げやりになっているのでしょうか。リポジトリでの入手文献が 増えて業務が軽減されるといいですね。(りん)
・よくない！ とつっこみが来そうですが、担当者の忙しさがにじんでいる 句ですね。川柳は語呂のよさが大事と思うんですが、これがピカイチだと思いました。(壇)

コピーよりスキャンで広がる笑顔の輪 -優雲

・多くのリポジトリで スキャンされた論文が公開されるといいですね～(壇)

ゐるや如何、其ハ古への やまひ也 -岳中将

・としよかんはあいえるえる。現物貸借もなほ。学術文献のおほくとびちがひたる。りぼじとりなど構築するもをかし。(有人)

バックナンバーやっとひっくり返して35円 -Yo2

・担当者の苦労が伝わってきます。「わかるわかる！」という声が 全国から聞こえてくるような・・・ 「ひっくり返して」を「見つけて」にすると語呂がよかったかも。(壇)

40円選びなおして35円 -潮香

・ILL担当者として個人的にいちばん共感できた句。たかが5円、されど5円。利用者のこと考えるとつい安めのところに依頼しがち、けれどもカラーコピーが高額で最終的に金額逆転したりの喜怒哀楽。(有人)

博士論文、毎回許諾とるんですか？ -スー

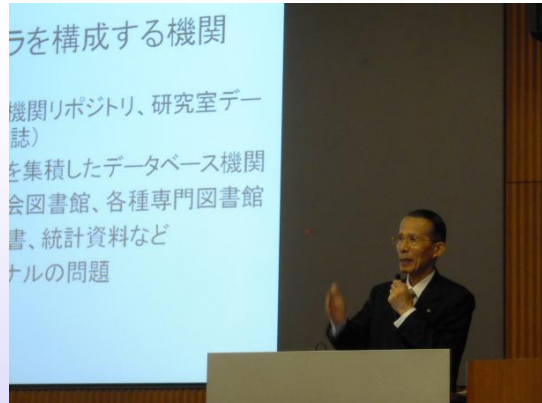
・依頼人しばし待たせて電子公開 あなたの後ろに道ができる。(結丸)

コピーですか？あ、それならCiNiiから読めますよ -沙淵

・おすごい、じゃあ俺の論文もサイニーに載せてよ。先生、違うんです、リポジトリに載せたら読めるんですよ。(結丸)

編集部
特派員
参加報告

シンポジウム「科学技術コモンズと情報知識学の挑戦」



長尾真国立国会図書館長による基調講演
「科学技術コモンズと情報知識学への期待」

平成22年5月15日(土) 13:00～17:40
東京大学本郷キャンパス工学部2号館213号室

シンポジウム全体では、学術論文以外にも、科学研究データをどう共有するのか、という点が議論の中心となっていました。基調講演のNDL長尾館長は、今後の学術情報の共有のための「知識インフラ」の立ち上げを提唱して、機関リポジトリもその一翼を担うとして、とりあげられていました。パネルディスカッションで会場から出た質問では、国の方針などによるトップダウンの戦略と研究者個人の発意や創意工夫によるボトムアップ型の情報発信やデータ共有とをどのように結びつけるのかといった点や、データ整備に携わるひとたち(キュレータといった表現がされていました)への経済的な見返りや社会的な地位向上を求める声もあがり、印象に残りました。



こういった議論は、研究者が持っている貴重な情報(論文や研究データ)をどのように公開して共有するかという点で、機関リポジトリにおける話題と共通しているなあ、と思いました。つまり、個別研究者の論文や研究データをどのように共有するか、そういった土壌をどのように作っていけばよいか、という議論は、現在の機関リポジトリの構築でも同じように課題となっているところなので、逆に、いわば先行して成功している機関リポジトリでの事例は逆にこういった議論の場にも共有できればなあと思いました。

記事作成協力 高久雅生(物質・材料研究機構 科学情報室)

次号
予告

【特集1】平成22年度DRF活動計画

イベント開催予定、国際連携活動ほか、機関リポジトリ構築・運営に関する取り組み予定を紹介！

【特集2】平成21年度CSI委託事業報告交流会

NII学術機関リポジトリ構築連携支援事業の諸活動の報告会、ポスターセッションの様態などを報告します

ほか、「Dr.FのFって?」、第1回SPARC Japanセミナー編集部特派員参加報告等を予定

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。gekkanrdf@gmail.com

月刊DRF第4号 平成22年5月31日発行 デジタルリポジトリ連合